

「感謝の気持ち」

東海学生卓球連盟 副幹事長 宮田采佳

この度は、第9回「日学連アゴラ」に文章を掲載して頂けることに、この場をお借りしまして感謝いたします。

私が学連で活動していく中で学んだことは「感謝の気持ち」です。それは、誰かがやってくれる仕事ではあるかもしれないけれど、それがあたりまえだと思わないことです。私は学連に、2年生の秋頃に加わりました。学連として大会の運営を支える側にも立ち、朝早くから家を出て、皆より会場に早く着き、会場を出るのは最後で家に着くのも夜遅く、思っていたよりも大変でした。大会当日だけでなく、地味な事務作業など、やることも多く、裏では沢山の方の関わりもあって動いていることを知りました。準備をしてくれる人がいるからこそ、大会が行われているというのは頭ではわかっていても、実際にその立場にならないとわからないものがありました。それは選手でもあるからこそ、気づけたのだと思います。

共に行動する学連の仲間とは、楽しいことがいっぱいありました。学連という共通の場所に関わりますが、それぞれ歩んできた道は違うので、その数だけ個性で溢れています。出来事というような大きく取り上げるものは浮かびませんが、たわいもない会話などの日常がとても楽しいです。学連の方々は、人思いで、温かい空気に包まれています。理事の方や他大学との交流ができることを嬉しく思います。これも学連の魅力だと思います。

以前に、試合会場先でトイレ清掃をしていたおばちゃんとお話したことがありました。そのおばちゃんはトイレ清掃のことについて、楽しくお話をされ、私から見たらとても輝いているように見えました。その時、何をやるかではなくて、どのような気持ちで取り組むかが大切なのではないかと感じました。これも、試合だけに集中していたら感じていなかったかもしれないです。

私は、大学生の間で視野を広げ、自分自身の可能性を広げることを一つ掲げていました。その為に、行動を起こし、幅広く色々な方々と関わることを意識していました。まだまだではありますが、人と関わる中で、相手を根本から尊重することが大切だと学びました。自分の知らずについてしまった固定観念や先入観などをなくして話を聞くことで、相手の視点に立って少し考えることができるようになりました。目に見えないものだからこそ、そこに気づける人になりたいです。まわりは、あたりまえのことやもので溢れていますが、それがあたりまえではないこと、誰かがやってくれているという「感謝の気持ち」を忘れずにしていきたいと思っています。

最後まで読んでいただきありがとうございました。